

研究委員会企画シンポジウム 2

「実践研究」論文のありかたをめぐって

企画・司会	森 敏昭 (広島大学)
企画者	中澤 潤 (千葉大学)
話題提供者	菊池章夫 (岩手県立大学)
企画・話題提供	市川伸一 (東京大学)
話題提供者	佐藤公治 (北海道大学)
指定討論者	無藤 隆 (お茶の水女子大学)

企画の主旨

教育心理学の教科教育や学校臨床との関わりは、近年益々深まり、教育実践の場においても多様な研究がなされている。日本教育心理学会ではこうした研究の発表の場として、「教育心理学研究」に新たなカテゴリーとして「実践研究」を設けることを検討している。しかしながら、「実践研究」ないし「実践研究論文」とはどのようなものか、またどうあるべきかについては一定の見解は得られていない。本シンポジウムでは、昨年の研究委員会シンポジウム「実践型の教育心理学研究をどのように進めるか」に引き続き、実践研究、特に「実践研究論文」のあり方を論議したい。本シンポジウムを通して「教育心理学研究」にふさわしい「実践研究」とは何かを考えるとともに、今後投稿していただく「実践研究論文」のイメージをフロアとともに探っていききたい。

話題提供の菊池章夫氏には、「教育心理学研究」の「実践研究」ワーキンググループの主査として、ワーキンググループにおける「実践研究論文」のあり方や位置づけの議論をご報告いただく。市川伸一氏からは「実践研究論文」の概念に関する調査結果をご報告いただく。佐藤公治氏には、多くの教科学習研究の体験の中から、あるべき「実践研究論文」とは何かを論じていただく。指定討論の無藤 隆氏からは、幼稚園・小学校の教育実践研究との関わりをもとに論議していただく。

「実践研究論文」ワーキンググループから

菊池章夫

「実践研究」の話がいつ頃から出てきたのかは、編集委員会には出席していたのだが、よく記憶をしていない。ただ言えるのは、論文査読の仕事で

していて「どうも同じようなスタイルの論文ばかりだな」とか「これは載せられないけど、面白いな」と思ったりすることが、以前よりも多くなったということはある。それに会員名簿を繰ってみると、前よりは狭い意味での研究者ではない会員が増えていて、この人たちはこの雑誌をどう見ているんだろうかと心配にもなった。

そこで「実践研究」なのだろうが、こうした欄を設けることには、あまり反対意見は出ない。ただ何が実践研究なのかという点では、意見が分かれる。WG1での議論をまとめた最終答申(13/9/'97)では、「授業研究、教育方法、学習相談、心理臨床等、現実場面における教育実践を直接の対象とした、ケース研究や開発研究」がそれであるとされている。ただしこの場合に、「教育心理学的な視点が盛り込まれていることを基本的な原則とし、「小・中・高校の学校教育のみでなく、幼児教育、高等教育、社会教育等の教育実践も広く含める」としている。

こうした定義はちょうど辞書の基本語（「歩く」や「左」など）の定義みたいなもので、苦心の割にはなかなか賛成が得られないという不運なことになる。（個人的には、少なくとも提言の部分がスキル言葉で書かれているといった条件をつけたい。）そこで議論はこれくらいにして、まず走り出して、走る中で次第に形を整えていこうという話が出る。このタイプの論文の査読を担当する編集委員を決めるとか、経過措置として依頼論文を載せるとか、「討論のページ」を作ってそこで実践研究の議論をすとかいったことが、考えられている。

現在の編集や印刷のスタイルを変えない限り、この方向へ動き出すのを決めても、その実施までには最低半年がかかる。そう考えると、決めるのは早い方がいい。間もなく21世紀である。